

るといふ、一つの神の啓示と行為との歴史をなす。先述したキリストとの連続性がより包括的になり、聖書は内部に強度の差異を包含しつつ、全体としてはイエス・キリストという統一性を維持することとなる。つまり、内村が生成としての神名において把握していたのは、歴史的な時間の中にグラデーシジョンのように生成してくる神であり、その生成の内に人間の救済に関わる啓示と恩寵とを与え続けてくれる神だったのである。

ここから以下のように考えられる。救済史の主体である神の行為は啓示のグラデーシジョンとしてアダムから使徒たちに至るまでの聖書の記事全てを連続的に貫き、イエス・キリストにおいて最も純粹な強度の啓示に達する。逆に言えば、聖書の各書や各々の登場人物における啓示は、強度が弱いにしても、イエス・キリストの啓示との同一性ないしは連続性を有する。聖書はその内部に強度の差異と全体的な統一性を持つこととなり、イエス・キリストとの同一性と不純物である他性との二重性において把握されることとなる。啓示のグラデーシジョンにより、微弱だが、しかし確かなイエス・キリストの働きが聖書全てに見出される。神名解釈の中に含まれていた生成する神という觀念がこのグラデーシジョンを可能とする。したがって内村の救済史的な聖書解釈を支えているのは神の啓示のグラデーシジョンであり、その根柢の一つとして神名の解釈があったと結論づけられる。

矢内原忠雄と新渡戸稲造——人間への眼差し——

森上 優子

本報告は、近代日本のキリスト者である矢内原忠雄（一八九三—一九六一）とその師である新渡戸稲造（一九六二—一九三三）を取り上げて、両者の「人間への眼差し」（人間観）の一端を明らかにしようとするものである。「人間への眼差し」は、彼らの活動を支えた思想としてとりわけ重要であると考えられる。

はじめに、矢内原の理想とする人間像をみてみよう。彼は人間の育成に際して「品性」を重視する。彼は「品性」を「個別的であり、人格が個々の人によって具体的な道徳的性格を帯びたもの」（「人間形成について」『矢内原忠雄全集』二十一巻）と規定する。彼がこのように「人格」を尊重する根底には、人間に「道徳的生命力」が内在するという理解があり、その源泉には「宗教」の存在があった。彼にとって、「宗教」とはまさしくキリスト教の意であり、「道徳的生命力」とはキリスト教倫理を指すものであると考えられる。ここに、彼のキリスト教信仰の反映を読みとることができであろう。矢内原は、教育を「人間を作り直すこと」といい、自己存在の根本に神との関係性を認識する人間、別言すれば、信仰に生きる人間の育成と捉えたのである。

さて、矢内原の信仰は、日本の民主化に対して独自の理解を与えるものであった。「日本の民主化が可能であるかという問題は、日本国民がキリスト教を受け入れるか、キリストを信ずることができるかということと、同じ問題なのです」（「日本の民主化は可能であるか」『矢内原忠雄全集』二十巻）。このよう

に、通常は政治思想で語られることの多いデモクラシーを宗教的観点から指摘し、宗教に根ざした道徳的主体として人間を捉え、重視した。

つぎに、新渡戸の人間理解に目を移してみよう。新渡戸は矢内原が第一高等学校に入学したときの校長であり、倫理の授業を担当するなど、積極的に人格教育を実践した人物である。矢内原に「新渡戸先生よりは人を学ん」(内村鑑三と新渡戸稲造)『矢内原忠雄全集』二十四巻)だという言葉があるが、当時の新渡戸の教育実践の内容を端的に示していると思われる。

新渡戸は、理想的な人間存在のあり方として「ソシアリチー」を主張した。それは、「できるだけ大きい寛容な心をもつて人と和して行くことを心がけ」(和辻哲郎)ることであり、「人間が共同生存せんとする性質」(『世渡りの道』『新渡戸稲造全集』八巻)の意であった。人格を尊重することによる人間の共生を説くものであったと言える。人間相互の尊重を基盤とする「ソシアリチー」には、万人に宿るとされる「内なる光」の存在を説くクエーカー派を通じた新渡戸のキリスト教信仰が大きな意味を有していた。その新渡戸もデモクラシーについて言及している。彼は、『武士道』において日本人の道徳観念を象徴させた武士道にデモクラシーが取って代わるという認識のもと、それを「平民道」と名付ける。デモクラシーを「道」、すなわち道徳と捉えるのである。

両者の課題は日本における人間と社会の再生であった。それは人間の共生や人類の平和という今日的課題に繋がるものとして再検討する必要があるだろう。

近代日本思想の宗教テキスト解釈

——ドストエフスキイと聖書から——

飯島 孝良

宗教にまつわる文学作品や思想テキストを読むとき、どのような伝統や文化を批判し受け継ぐべきかという点については、いつでも起こりうる疑問である。しかしそのとき、思想の根拠となったテキストとその関連をどう分析するか、非常にデリケートな問題を呈する場合がある。たとえば近代日本思想の取り扱いに関しては、ひとつには『ドストエフスキイの哲学』(一九五〇)という討議録に例をとることができる。これは、終戦直後という東西思想の瓦解と再構築が求められる転換期にあつて、新たな日本思想の在り方をドストエフスキイ作品を踏まえて模索した討議であった。この中で森有正は、ドストエフスキイ思想の根本には「福音書の中のイエス・キリスト」への信仰と否定との揺れ動きがある、と非常に重要な指摘をしたにもかかわらず、当の福音書の分析にまでは論を進めていない。これは森だけではなく、討議に参加した他の思想家も同様であり、その思想の拠り所たる経典やテキストにまで分析するに至っていないのである。

より具体的な例としてドストエフスキイの『悪霊』を挙げる。これは近代ロシアが自由意志を重んじる余り、急進的スラヴ主義やニヒリズムの無神論や社会主義革命へと自壊する様子を描く作品であるが、それはつまり、近代西欧特有の「我意」に傾倒する余り、旧来重んじられた「父」「皇帝」のみならず「神」「イエス」をも否定する流れを生んでいる事実を、強烈に